



日本文学全集 13



志賀直哉

暗夜行路

小僧の神様 他



河出書房

日本文学全集 13 志賀直哉



© 1973

責任編集

武者小路実篤 川端康成
石坂洋次郎 山本健吉
瀬沼茂樹

昭和43年3月29日 初版発行

昭和48年10月30日 8版発行

著	者	志賀直哉
発行	者	中島隆之
印刷	者	草刈龍平
装	幀	原弘

印刷 刷・中央精版印刷株式会社
製 本・中央精版印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

定価はカバー・帯にあります

目次

暗夜行路 三

或る朝 三〇〇

網走まで 三〇三

母の死と新しい母 三二〇

正義派 三二六

清兵衛と瓢箪 三三三

范の犯罪 三三六

城の崎にて 三三五

赤西蠣太 三四〇

小僧の神様 三五三

真 鶴 三六一

プラトニック・ラヴ 三六五

灰色の月	三六九
自 転 車	三七一
リズム	三七九
内村鑑三先生の憶い出	三八二
太宰治の死	三九三
創作余談（抄）	三九七
続創作余談（抄）	四〇〇
続々創作余談（抄）	四〇五
年 譜	四〇九
文学入門	四一七
作家の横顔	四二五
武者小路実篤	四二五

暗夜行路

武者小路実篤兄に捧ぐ

序 詞（主人公の追憶）

私が自分に祖父のあることを知ったのは、私の母が産後の病気で死に、その後二月ほど経って、不意に祖父が私の前に現われて来た、その時であった。私の六歳の時であった。

ある夕方、私は一人、門の前で遊んでいると、見知らぬ老人がそこへ来て立った。眼の落ち窪んだ、猫背の何となく見すばらしい老人だった。私は何ということなくそれに反感を持った。

老人は笑顔を作って何か私に話しかけようとした。しかし私は一種の悪意から、それをはぐらかして下を向いてしまった。釣上った口元、それを開んだ深い皺、変に下品な印象を受けた。「早く行け」私は腹でそう思いながら、なお意固地に下を向いていた。

しかし老人はなかなかその場を立去ろうとはしなかった。私は妙にいたたまらない気持ちになって来た。私は不意に立上って門内へ駆け込んだ。その時、
「オイオイお前は謙作かネ」と老人が背後から言った。
私はその言葉で突きのめされたように感じた。そして立止った。振返った私は心では用心していたが、首はいつかおとなしくうなずいてしまった。
「お父さんは在宅かネ？」と老人が訊いた。
私は首を振った。しかしこのうわ手な物言いが変に私を圧迫した。

老人は近寄って来て、私の頭へ手をやり、
「大きくなった」と言った。

この老人が何者であるか、私には解らなかった。しかしある不思議な本能で、それが近い肉親であることをすでに感じていた。私は息苦しくなってきた。

老人はそのまま帰って行った。

二三日するとその老人はまたやって来た。その時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。

さらに十日ほどすると、なぜか私だけがその祖父の家に引きとられることになった。そして私は根岸のお行の松に近いある横町の奥の小さい古家に引きとられて行つた。

そこには祖父の他に、お栄という二十三歳の女がいた。

私の周囲の空気は全く今までとは変っていた。すべてが貧乏臭く下品だった。

他の同胞が皆自家に残っているのに、自分だけがこの下品な祖父に引きとられたことは、子供ながらに面白くなかった。しかし不公平には幼児から慣らされていた。今に始まったことでないだけ、なぜかを他人に訊く気も私には起らなかった。しかしこういう風にして、こんなことが、これからの生涯にもたびたび起るだろうという漠然とした予感が、私の氣持を淋しくした。それにつけても私は二カ月前に死んだ母を憶い、悲しい氣持になった。

父は私に積極的につらく当ることはなかったが、常に冷たかった。が、このことには私はあまりに慣らされていた。それが私にとって父子関係の経験としての全体だった。私は他の同胞の同じ経験をそれに比較するさえ知らなかった。それゆえ、私はそのことをそう悲しくは感じなかった。

母は何方かと言えば私には邪慳だった。私はことごとに叱られた。実際私はきかん坊でわがままでもあった。が、同じことが他の同胞では叱られず、私の場合だけでは叱られるようなことがよくあった。しかし、それにもかかわらず、私は心から母を慕い愛していた。

四つか五つか忘れた。とにかく、秋の夕方のことだった。私は人々が夕餉の支度で忙しく働いている隙に、しも手洗場の屋根へ懸け捨ててあった梯子から誰にも気づかれずに一人、母屋の屋根へ登って行ったことがある。棟伝いに鬼瓦のところまで行って馬乗りになると、変に快活な気分になって、私は大きな声で唱歌を唄っていた。私としてはこんな高いところへ登ったのは初めてだった。普段下からばかり見上げていた柿の木が、今は足の下にある。

西の空が美しく夕映えている。鳥が忙しく飛んでいる……

間もなく私は、

「謙作。——謙作」と下で母の呼んでいるのに気がついた。それは氣味の悪いほど優しい調子だった。

「あのネ、そこにじっとしているのよ。動くのじゃ、ありませんよ。今山本が行きますからネ。そこにおとなしくしているのよ」

母の眼は少し釣上って見えた。ひどく優しいだけだごとでないことが知れた。私は山本の来るまでに降りてしまおうと思った。そして馬乗りのまま少し後じさった。

「ああっ——」母は恐怖から泣きそうな表情をした。「謙作はおとなしいこと。お母さんの言うことをよくきくの

ネ」

私はじっと眼を放さずにいる、変に鋭い母の視線から縛られたようになって、身動きができなくなった。

間もなく書生と車夫との手で私は用心深く下された。

案の定、私は母から烈しく打たれた。母は亢奮から泣き出した。

母に死なれてからこの記憶は急に明瞭して来た。後年もこれを憶うたび、いつも私は涙を誘われた。何といっても母だけはほんとうに自分を愛してくれて、私はそう思う。

前後はわからない。が、そのころに違いない。

私は一人茶の間で寝ころんでいた。そこに父が帰って来た。父は黙って、袂から菓子たもとの紙包みを出し、茶筥ちやだんすの上に置いて出て行った。私は寝たまま、じろじろそれを見ていた。

父がまた入って来た。そして、今度は紙包みを戸棚とだなの奥へしまい込んで、出て行った。

私はむっとした。気分が急に暗くなった。間もなく母が、父の脱ぎ捨てた外出着を持って、次の間へ入って来た。私にはわがままな氣持がむやみと込み上げて来た。泣きたいような、怒りたいような氣持だった。

「母さん、お菓子」

「何を言うんです」母は言下に叱った。その少し前に私はその日のおやつをもらっていたのだ。

「何か。よう、何か」

母は応じなかった。そして、畳たたんだ着物を筥笥へしまつて出て行こうとした。

私は起き上って、

「よう、何か」こういって、母の前へ立ちふさがった。

母は黙って私の頬をぐいとつねった。私は怒ってその手をピシヤリと打った。

「もう食べたじゃ、ありませんか。何です」母は私をにらんだ。

私は露骨に父の持つて帰った菓子をせびり出した。

「いけません。そんな……」

「いや！」私は権利をでも主張するように頑固がんこに首を振った。何しろ、私は氣持がクシヤクシヤしてかなわなかった。その菓子がそれほど食いたいのではない。とにかく、思い切り泣くか、怒られるか、打たれるか、何かそんなことでもなければ、どうにも氣持が変えられなくなっていた。

母は私の手を振り払って、出て行こうとした。私は後ろから不意に母の帯へ手をかけ、ぐいと力いっぱい引いた。母はよろけて障子につかまった。その障子はずれた。

母は本気で怒り出した。そして、私の手首をつかみ、ぐんぐん戸棚の前へ引張って行った。母は片腕で私の頭を抱えておいて、いやがる私の口へその厚切りの羊羹を無理に押し込んだ。食いしばっている味噌歯の間から、羊羹が細い棒になって入って来るのを感じながら、私は度胆を抜かれて、泣くこともできなかった。

亢奮から、母は急に泣出した。しばらくして私も烈しく泣出した。

根岸の家ではすべてが自堕落だった。祖父は朝起きると楊子をくわえて銭湯へ出かけた。そして帰るとその寝間着姿で朝餉の膳に向った。

来る客も変わったいろいろな種類の人間が来た。ことに花合戦をする、その晩には妙な取合せの人々が集まって来た。大学生、それから古道具屋、それから小説家（う）、それから山上さんと皆が言っている五十あまりのちよっと未亡人らしい女などであった。この女はそのころの医者が持ったような小さい黒革の手さげ鞆を持って来た。それには、きまってたくさん小銭と、一揃いの新しい花札と太い金縁の眼鏡とが入っていたそうである。しかしこの女は未亡人ではなく、そのころ大学で歴史を教えていたある年寄った教授の細君で、この女の甥がかつてお栄と同棲していた、その縁故で、良人に隠れ

て好きな遊びごとのために来たのだということである。その甥という男は大酒飲みで、葉巻のみで、そして骨まで浸み貫つた放蕩者で、とうとうその二三年前にほとんど明らかな原因なしに自殺してしまったということを私は二十年ほどしてお栄から聞いた。

山上という女は十時ごろには大概帰って行った。するとそのころになって、東京者の癖に大阪弁ばかり使う若い寄席芸人がよく仲間へ入りに来た。

お栄は勝負には入らなかったが、祖父の勝敗には多分實際上の気持から、よく焦慮して口出しをしていた。そういう時、いつも下品な皮肉を言って皆を笑わせるのはその寄席芸人であった。

後年私は、なぜそれほど、困りもしないのに祖父はあんな暮らし方をしたろうと、よく考えた。月々困らぬだけの金は父から来ていたのである。それなのに、祖父はがらくた道具の売り買いをしたり、がらくた道具屋の競売に家を貸して席料を取ったりした。もうけずく以上、祖父の趣味のようにも思えた。

お栄は普段少しも美しい女ではなかった。しかし湯上に濃い化粧などすると、私の眼にはそれが非常に美しく見えた。そういう時、お栄は妙に浮き浮きとすることがあった。祖父と酒を飲むと、そのころの流行歌を小声で唄ったりした。そして、酔うと不意に私を膝へ抱き上

げて、力のある太い腕で、じつと抱き締めたりすることがあった。私は苦しいままに、何かしら気の遠くなるような快感を感じた。

私は祖父をしまいまで好きになれなかった。むしろ嫌いなになった。しかしお榮はだんだんに好きになって行った。

根岸の家へ移って半年あまり経ったある日曜日が祭日のことであつた。私は久しぶりで祖父に連れられて、本郷の父の家へ行った。ちょうど兄は書生と目黒の方へ遠足に行つて、咲子というまだ一年にならぬ赤児とそして父だけが家にいた。

祖父と一緒に父の居間に挨拶に行くとき、その日父は珍らしく機嫌がよかった。父はいつにない愛想らしいことを私に言つた。父としてはそれは気まぐれだつた。何かその日気分がいいことがあつたのかも知れない。しかしそんなことは私には解らなかつた。私は何かしら惹かれるような心持で、祖父が茶の間へ引きかえしてから、一人そこに残っていた。

「どうだ、謙作。一つ角力をとろうか」父は不意にこんなことを言い出した。私はおそく顔いっぱいに嬉しさを現わして喜んだに違いない。そしてうなずいた。

「さあ、来い」父は坐つたまま、両手を出して、かまへ

た。

私は飛び起きざまに、それへ向つて力いっぱい、ぶつかつて行つた。

「なかなか強いぞ」と父は軽くそれを突返しながら言つた。私は頭を下げ、足を小刻みに踏んで、またぶつかつて行つた。

私はもう有頂天になつた。自身がどれほど強いかを父に見せてやる氣だつた。實際角力に勝ちたいというより、私の氣持では自分の強さを父に感服させたい方だつた。私は突返されるたびに遮二無二ぶつかつて行つた。

こんなことは父との関係ではかつてなかつたことだ。私は身体全体で嬉しがつた。そして、おどり上り、全身の力で立向かつた。しかし父はなかなか私のために負けてはくれなかつた。

「これなら、どうだ」こういつて父は力を入れて突返した。力いっぱいにぶつかつて行つたところには、ずみを食つて、私は仰向けざまに引っくりかへつた。ちよつと息が止まるくらい背中を打つた。私は少しむきになつた。そして起きかえると、なお勢い込んで立向かつたが、その時私の眼に映つた父は今までの父とは、もう變つて感ぜられた。

「勝負はついたよ」父は亢奮した妙な笑い声で言つた。

「まだだ」と私は言つた。

「よし。それなら降参と言うまでやるか」

「降参するものか」

間もなく私は父の膝の下に組敷かれてしまった。

「これでもか」父はおさえている手で私の身体をゆす振った。私は黙っていた。

「よし。それならこうしてやる」父は私の帯を解いて、私の両の手を後手に縛ってしまった。そしてその余った端で両方の足首を縛り合せてしまった。私は動けなくなった。

「降参と言ったら解いてやる」

私は全く親しみを失った冷たい眼で父の顔を見た。父は不意の烈しい運動から青味を帯びた一種殺氣立った顔つきをしていた。そして父は私をそのままにして机の方に向いてしまった。

私は急に父が憎らしくなった。息を切って、深い呼吸をしている、父の幅広い肩が見るからに憎々しかった。

そのうち、それを見つめていた視線の焦点がぼやけて来ると、私はとうとう我慢しきれなくなって、不意に烈しく泣き出した。

父は驚いて振り向いた。

「何だ、泣かなくてもいい。解いてくださいと言えればいいじゃないか。馬鹿な奴だ」

解かれても、まだ私は、なき止めることができなかった。

た。

「そんなことで泣く奴があるか。もうよしよし。彼方へ行つて何かお菓子でももらえ。さあ早く」こう言つて父はそこにかかるがっている私を立たせた。

私はあまりに明らさな悪意を持ったことが羞かしくなった。しかしどこかにまだ父を信じない氣持が私には残っていた。

祖父と女中とが入つて来た。父は具合悪そうな笑いをしながら、説明した。祖父は誰よりもことさらに声高く笑い、そして私の頭を平手で軽く叩きながら「馬鹿だな」と言った。

第一

時任謙作の阪口に対するだんだんに積もっていった不快も阪口の今度の小説でとうとう結論に達したと思うと、彼は腹立たしいうちに清々しい気持になった。そして彼はその読み終った雑誌を枕元へ置くのも穢らわしいような心持で、夜着の裾の方へほうって、電気を消した。三時近かった。

彼はやはり興奮していた。頭も身体も芯は疲れていながらなかなか眠ることができなかった。彼は頭を転換さすために何か気楽な読物を見ながら睡むくなるのを待とうと考えた。が、そういう本は大概お栄の部屋へ持って行ってあった。彼はちよつと拘泥したが、拘泥するだけ変だとも思い返して、ふたたび電気をつけて二階を降りて行った。襖の外で、

「ちよつと本を貰いに来ました」と声をかけて、「塚原ト伝は戸棚ですか」と言った。

お栄は枕元の電燈をつけた。

「床の間か、茶簞笥の上ですよ。まだ起きてたの?」
「眠むれなくなつたんで、見ながら眠むるんです」
謙作は茶簞笥の上から小さい講談本を持って、「明日」と言つてその部屋を出た。
「御機嫌よう」こういつて、お栄は謙作が襖を締めるのを待つて電燈を消した。

謙作はその気楽な講談本を読みながら、朝露のような湿り気を持った雀の快活な啼声を戸外に聴いた。

翌日はどんより曇つた静かな秋の日だ。午過ぎて一時ごろ、彼はお栄の声で眼をさました。

「龍岡さんと阪口さん」

彼は返事をしなかった。返事をするのが物憂くもあつた。が、それよりも今日阪口に会うということがまだはつきりしない彼の頭ではひどくこんがらかつた問題であつた。

「あちらへお通ししてよ。すぐ起きてくださいよ」こう言つて出て行くのを、

「阪口だけ断つてください」と彼は言った。

「どうして?」お栄は驚いたように振り返り、両手を襖に掛けたまま、立っていた。

「じゃあ、よろしい。二人とも通しておいてください。

すぐ行きます」

謙作をそれほど不愉快にした阪口の小説というの

は、ある主人公がその家うちにいる十五六の女中と関係して、その女にできた赤児を墮胎だたうすることを書いたものであった。謙作はそれを多分事実だと思った。そしてその事実も彼には不愉快だったが、それをする主人公の気持がいかに不まじめなのに腹を立てた。事実は不愉快でも、主人公の気持に同情できる場合は赦ゆるせるが、阪口の場合は書く動機、態度、すべてが謙作にはいかにも不まじめに映った。なおその上うへにそれに出て来る主人公の友達というのはどうしても自分をモデルにしているとしたか彼には考えられなかった。その友達に対する主人公の気持が彼を怒らした。

主人公はその女があまりに子供らしく無邪気なために誰からも疑われないのを利用して、平気で友達の前でその女をからかったり、いじめたりすることを書いていった。お人よしで、何も気がつかずにいる友達がそれをしきりに心で同情している。主人公はなお皮肉にそれを見抜きながら、多少いらいらもして、その女を泣かすことなどが書いてあった。

謙作はその女中を実際嫌いではなかった。いかにも無邪気で人がよさそうな点を可愛く思ったこともある。しかし阪口がこれとただの関係でいそうもないことは大概察さしていた。それが阪口の小説では何も知らぬ友達が心密かにその女を恋しているように書いてあった。そして

主人公は腹に、ややともすると起ってくる嘲笑ちやうしやうを抑え、それを冷やかに傍観ぼうくわんしていることが書いてあった。主人公が他人の心を隅から隅まで見抜いたような、しかも、それがいかにも得意らしい主人公の気持が謙作をむかむかせた。

しかしそれにしてもなぜ今日訪ねて来たか。その雑誌が出てからもう一週間になる。その間何か自分から烈しい抗議の手紙でも来そうに思いながら、なかなか来ない。その不安にかえって脅迫きようはくされて出て来たのではないかしら。それとももっと性の悪い偽悪者根性から、太々しい面構つらえを自分に見せるつもりで来たのかも知れないと謙作は疑った。もしかしたら手取り早く、面と向かって思いきり言ってやってもいいと考えた。

謙作の考えはだんだん誇張されていった。彼は顔を洗いながらこんな考えで興奮した。

茶の間で着物を着かえていると、座敷の方から二人のしている話はなしが聴こえてきた。二人はいいかにも呑気のんきな調子で話していた。謙作は何だか自分だけが鯨張くじやうぢやうっているような変な気がした。皆が平気でいる中に一人怒っている自分が狐につままれたように馬鹿ばかげても見えた。そして彼は一人不愉快を感じた。

「昨晩はおそかったって？」彼が座敷へ入ると、龍岡が気の毒なみしたという気持を現わして言った。

「もう起きるころだったのだ」

阪口はお栄が出ておいたその日の新聞を見ながら何気ない顔をしていた。謙作は阪口が今自分が想像していたような気持で来たのではないことを知った。例のだらしないさからずると龍岡に誘われて来たに違いなかった。それでも彼は、「君たちはどこで会ったんだ」と念のために龍岡に訊いてみた。

「僕が連れ出したのさ」と龍岡は答えた。そして「こいつの今度の小説を見たかい？」と龍岡は特に「こいつ」という言葉で一面ある親しみをも含んだ軽蔑の流し眼を阪口へ向けながら言った。謙作は返事をしなかった。

「いやな小説だ。それもいいが、中に出て来る氣の利かない友達を僕をモデルにして書いてあるのだ。昨日見てすっかり腹を立てて、今朝起きぬけに出かけて、怒ってやったところだ」

阪口は新聞から眼を放さず、にやにや笑っていた。龍岡は一人言い続けた。

「大部分空想だと言うが、怪しいものだ。阪口のやりそうなことだ」

阪口はこんなに言われても別に不愉快な顔もしなかった。彼の腹は解らなかつた。しかし彼の行為の上の趣味から言つて、こんなに言われながらただにやにやしていることは確かに彼自身氣に入っているに違いなかつた。

そういうところに優越を彼は示そうとしている。また一つは龍岡が全然異う仕事をしているところからも、その余裕を持てるらしかつた。龍岡はその年工科大学を出て発動機の研究のため近くフランスへ行くつもりでいる。

「他人の氣持を見透したような書き振りが一番不愉快だと言つてやったんだよ。たまには当ることもあるが、人間の氣持はすぐ動いているから、次の瞬間にはもうそれを反省しているし、ある場合、同時に反対した二つの氣持を持つていることもある。ところが阪口の書く物では主人公に都合のいい氣持だけが見られて、不都合な方にはまるで色盲なんだ」

「もう解つたよ。何遍繰返したって同じことだ」阪口もちょっと不快な顔をした。

「今朝からさんざん油をしぼっているんだよ」龍岡は謙作の方を向いて多少神経的に笑つた。

「しつこい奴だ」と阪口が独語のように言つた。

「ええ？」龍岡もむっとして言つた。「このくらしいことを言われて君に腹を立つ資格はないよ。腹を立つなら、もっといくらでも言うよ。君は一トかど悪者がっているが、悪者としてちつともなつてないじゃないか。書いたものでは相当悪者らしいが、要するに安っぽい偽悪者だ。——墮胎が何だい」龍岡はつっぱなすように言つた。彼は今まで快活らしくはしていたが、その実阪口の

にやにやした態度に不愉快を感じていたらしかった。そして、それを破裂させた。龍岡は小柄な阪口に較べては倍もあるような大男で、その上柔道が三段であった。そういう点からも阪口はすっかり圧迫されてしまった。

謙作は先刻から阪口に対する自分の態度をどう決めていかかわからないでいるうちに龍岡がこんな風にやってしまったので、その白けた一座をどうしていいか分からなかった。そのまま三人は黙っていた。

「船は決ったのかい？」しばらくして謙作が沈黙を破った。

「十一月十二日の船にした」

「支度はもうできたのかい」

「別に大した支度もないからネ。——それはそうと、浮世絵を少し買っ行って行きたいと思うんだが、いつか一緒に見に行ってもらえないかな。どうせそう高い物は買えないが、彼方で世話になる人の贈物にしようと思うんだ」

「此方もよくは解らないが、いつでもいい。行こう。しかしこのごろは随分高くなつたらしいよ。前の相場を知っているを買う気がしないそうだ。もしかするとバリーで買う方が安い物があるかも知れないよ」

「そいつは困るな。何か別の物にするかな」

「榛原の千代紙でも持つて行っちゃ、どうだい。生じっかな浮世絵より子供のある家なんかは喜ぶだろう」

謙作は阪口の氣押されたような様子を見ると氣の毒な氣もしたが、あの作中の友達が龍岡の言うように龍岡をモデルにしたものとは思えなかった。なるほど書かれた場面は大概自分の知らぬ場面であった。けれどもその性格は阪口の眼に映った自分をモデルにしていると思われなかった。實際阪口が龍岡にそう言うかどうかは分らないが、「場面はなるほど君との場面を借りた。しかし性格がまるで異うじゃないか」こんなことを言いそうな氣が謙作にはした。謙作はこれは阪口の猾いやり方だと思った。もし自分が性格だけは僕をモデルにしたに違いないと掛合っていけば、それは同時に自身の性格をその作中の下らない人物のそれに近いものと認めることになる。むしろ書かれた場面が實際自分との間にあったこととならばかえって怒りいい。しかし性格だけを自分に取つたらうとは言にくかった。それほどに下らない人物に書いている。龍岡が怒れば君をあんな性格の人間とは誰が思うものかと言ひ、自分が怒れば、君はああいう性格の人間と自分で思っているのだねと言ひ兼ねない。ここに阪口の変な得意がありそうに思うと謙作はなお腹が立った。今の謙作は阪口に対しては極端に邪推深くなつていた。前に彼を信じていただけに、それを裏切られた今は、ことごとくにこういう邪推が浮ぶのであった。ことに愛子とのこと以来、それははなはだ面白くない傾向だ

と知りつつも、彼は妙に他人が信じられなくなった。今も前夜からの阪口に対する気持を考えて、龍岡が彼自身だけがモデルにされたように怒っているのを見てさへある疑いを持つのであった。

龍岡には昔気質がある。もしかしたら作中の友達が同時に謙作をもモデルにして書かれてあることを承知の上で、わざと自身だけがモデルかのように言つて、阪口をやつつけたのではあるまいかと、謙作は思った。龍岡はそうすることで一方阪口を懲らし、他方で、二人の間を多少でも気まずくなくして日本を去りたいと思つてゐるのではあるまいか。それでなければ阪口をわざわざ連出して来て、自分の前でこれほどにやつつけることが普段の彼の気質としては少し不自然に考えられた。龍岡には短気な性質もあった。しかし自分だけの問題に第三者のいる前であれほどに露骨に言う彼とも思へなかつた。謙作にはそこに何か彼の昔気質から出た思惑がありそうにも思われた。

二

新開地のような泥濘路に下品な強い光がさしている。両側の家々からは鮮やかな、しかし神経を疲らしている者は、そのため吐気を催すかも知れないほど、あくどい色の着物を着た女たちが往來を通る男に叫びかけてい

る。それは憐憫を乞うようにも、罵るようにも聴きなされる叫び声であつた。

龍岡と謙作とはもうすっかり圧倒されてしまった。二人は並んで往來の中ほどを真直ぐに急ぎ足で歩いてゐたが、それでも龍岡は小声で、

「なかなか綺麗な女がいるネ」などと言つた。

その日三人が赤坂福吉町の謙作の家を出たのは四時ごろだつた。気不味い感情を脱け出せずにゐる阪口はすぐ二人と別れたがつたが、龍岡はなかなか彼を離そうとしなかつた。龍岡にはこのまま別れてしまうのはいかにも寝ざめが悪いらしかつた。彼は自身があまりに言い過ぎたことを多少悔いてもゐる風だつた。そして三人は龍岡の千代紙を買うつきあいをして日本橋の方へ行つたのである。

木原店のある料理屋で食事をした。謙作はほとんど飲めない方だつたが、そこを出た時には他の二人はかなり酔つてゐた。

龍岡が突然、これから吉原見物に行きたいと言ひ出した。西洋へ行く前に見たことのない吉原を一度見て行きたいと言ふのだ。

「謙作、いいだろう？ ただ見物だけだ」彼は気兼ねをしながら謙作を顧みた。謙作もまだそういう場所を知らなかつた。彼は不愛想に生返事をしたものの、心ではか

なり拘泥した。そういう場所には決して足を踏入れまいというほどの気はなかった。何方かと言えば多少の興味もあった。それゆえ、今龍岡にそれを言われると冷淡を粧いながら、妙にドキリとした。

——謙作と龍岡で電信柱の多い仲の町まで出て、そこで遅れた阪口の来るのを待っていた。阪口はいかにも酔漢らしい様子をしながら、格子とすれすれに、時々何か女に串戯口をききながら歩いていった。

「オイ、早く来ないか」と龍岡が声をかけた。「空模様が少し変になって来た」

阪口は聴えない振りをしてやはりぶらぶらと歩いている。謙作は空を仰いで見た。黒い雲が建並んだ大きな建物の上に重苦しく被いかぶさっていた。

「俺たちはもう帰るよ。一緒に帰るかい？ それとも別れるかい？」と龍岡が言った。阪口は何かぐずぐず言っていた。そして三人はそのままその通りを大門の方へ歩いた。

ポツリポツリ雨が落ちて来た。三人はかなり疲れていた。結局その辺の茶屋で少し休んで行くことにした。筆太にいろいろな屋号を書いた行燈を出した同じような家が両側に軒を並べている。三人はいい加減に西緑と書いた、その一軒に入った。

眉毛の薄い、瘦せた四十あまりの女将が、寒むそうに

両袖を胸の上で畳み合せ、店先に立って、雨の降出した往来を眺めていたが、

「どうぞ」と言って、まだニスの香の高い洋風の段々から彼らを表二階の座敷へ導いた。新築の白っぽい木地には白熱瓦斯のケバケバしい強い光りが照り反していた。そしてそれとはおよそ不調和に、文晁とした、汚れ切った横物の山水が浅い置床に掛けてあった。ニスの香の高い洋風の段々と言い、この不調和な生々しい座敷の様子と言い、芝居の仲の町とは大分趣の異ったものだと言作は思った。彼は多少落ちつかない気持で、柱に背を寄せかけて、ジーンと音でもしていそうな疲れ切った膝から下を立膝にし、抱えていた。

女将と入れ代って眼の細い体の大きな、象のような印象を与える女中が茶道具を持って入って来た。

「小稲という人はいるかい」物馴れた調子で阪口が訊いた。

「さあ、もう晩うござんすから、あればようございますが。お馴染なんですか」

「いいえ」阪口はすまして答えた。

人のよさそうな女中はそれを真に受けていいものか、どうかを迷うらしかった。そして、

「ちょっと見てまいりましょう」と降りて行った。

謙作も龍岡も何かしらぎこちない気持に捉えられてい